様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３２５１４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ１３５５４

研究課題名（和文）15世紀東方キリスト教諸教会の連携と東西教会合同運動への反応に関する研究

研究課題名（英文）Relationships between the Churches of the East in the Fifteenth century Middle East

研究代表者
辻　明日香（TSUJI, Asuka）

川村学園女子大学・文学部・准教授

研究者番号：６０５４９５０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：15 世紀、ヨーロッパにおいて東西教会合同運動が盛り上がっていた頃、中東においても、反カルケドン派の東方キリスト教諸教会は互いの連携を強化し、カトリック教会による呼びかけにも積極的に対応していた。ペスト流行後の世界を東方キリスト教諸教会は互助しあうことで生き残っていったと推測されるが、本研究はその萌芽を十字軍期（11-13 世紀）エルサレム王国周辺における、キリスト教諸教会の接触に見出し、十字軍期西アジアにおける様々な勢力の絡み合いに注目し、東方キリスト教諸教会間の連携、ラテン（カトリック）教会への対応などを考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
東方キリスト教諸教会の一部が、東西教会の再合同を目指したフェラーラ＝フィレンツェ公会議に使節を送ったことは知られているが、この時期の東方キリスト教諸教会に関する研究はわずかである。その結果、一般には15世紀以降にヨーロッパが彼らの存在を「発見」し、宣教を通じて「啓蒙」したと考えられがちである。本研究の意義は15世紀における東西教会の接触の萌芽を十字軍期（11-13 世紀）エルサレム王国周辺における、キリスト教諸教会の接触に見出したことにある。

研究成果の概要（英文）：In the 15th century, when the movement for the union of Eastern and Western churches was gaining momentum in Europe, anti-Chalcedonian Eastern Christian churches in the Middle East were strengthening their ties with each other and actively responding to calls by the Catholic Church. This study examines how Eastern Christian churches in the Middle East survived by helping each other, despite being weakened by persecution and the plague, with a focus on the Coptic Church.

研究分野：西アジア史

キーワード：東西教会合同運動　コプト教会　十字軍　東方教会　異文化交流

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

現在、中東のキリスト教徒はディアスポラにより、共同体消滅という空前の危機を迎えている。歴史を振り返ると、中東のキリスト教徒は幾度となく危機をむかえてきた。そのなかでもとりわけ、14 世紀に中東を襲ったペストの大流行や各地のイスラーム政権によるキリスト教徒やユダヤ教徒に対する迫害の影響が大きかった。14 世紀の迫害についてはよく知られているが、15 世紀からオスマン朝に至るまでの期間における中東各地の教会の動向についてはほぼ知られていない。

この時期、コプト教会（エジプト土着の反カルケドン派教会）とシリア正教会（歴史的大シリアの反カルケドン派教会）など、宗派が異なる各地の教会が互いに連携し、自国の政権や信徒、ヨーロッパとの関係を模索し新たな道を切り開こうとしていた。すなわち、ヨーロッパにおいて東西教会合同運動が盛り上がっていた頃、中東においても、エジプトのコプト正教会はシリア正教会やエチオピアのソロモン王朝との連携を強化し、カトリック教会による呼びかけにも積極的に対応していたのである。

これら教会が東西教会の再合同を目指したフェラーラ＝フィレンツェ公会議に使節を送ったことは知られているが、公会議に関するカトリック教会の動きやその背後にあるヨーロッパ情勢については研究の蓄積があるものの、反カルケドン派である東方キリスト教諸教会に関する研究はわずかである。これには、一般に 15 世紀から 18 世紀末までの時代、中東の東方キリスト教諸教会は活動停滞期にあり、ヨーロッパが彼らの存在を「発見」し、宣教を通じて「啓蒙」したと考えられていることが背景にあるかもしれない。本研究はコプト教会やシリア正教会などの所蔵資料から、東方キリスト教諸教会自体の動向を明らかにしたい。

２．研究の目的

本研究は、迫害やペストの影響により弱体化しながらも、中東各地の東方キリスト教諸教会が互助しあうことで生き残っていった様相を、コプト教会を中心に研究する。様々な勢力の絡み合いに注目し、15 世紀という時代において、東方キリスト教諸教会間の連携、各教会内におけるカトリック教会の合同運動への対応、政権や信徒との関係を検討し、時代の要請に応じて新たな教会の姿を模索していった東方教会の姿を考察する。

３．研究の方法

2017 年度は、東方キリスト教諸教会とローマ・カトリック教会との歴史的関係を考察するために、時代を十字軍時代に遡り研究を進めた。まずはこの時代に関する研究文献を収集し、先行研究の整理や史料の分析を行った。十字軍時代の中東における東方教会の状況については研究がさほど存在しないため、当時の情勢を明らかすることは、その後の両教会間の関係を理解するために重要である。

2018年度も、十字軍時代を中心に東方キリスト教諸教会とローマ・カトリック教会との歴史的関係を考察した。文献収集や史料の読解につとめ、①コプトと十字軍諸勢力との交流、②東方キリスト教諸教会の対ラテン教会（カトリック教会）観と交流の実態を中心に分析を行った。

2019年度は13-15世紀に形成された、キプロス島におけるコプト教会のコミュニティーに注目した。このコミュニティーの形成にはコプト教会と十字軍国家との良好な関係が寄与していたと思われるが、謎が多い。飢饉によるエジプトからシリア方面への移住やアッコンにおけるコプトの存在、キプロスに関する同時代史料からこの問題を検討した。

2020年度も引き続き文献収集や史料の読解につとめ、13-15世紀に形成された、キプロス島におけるコプト教会のコミュニティーについて研究した。また、エルサレムとその周辺におけるビザンツ教会の活動について分析をした。エルサレム周辺に隠遁するビザンツ系の修道士と、ラテン教会やコプト教会などの修道士らとの交流に注目したところ、東方諸教会間、ラテン教会と東方教会、という単純な図式にあてはまらない相互交流の姿が示唆された。

2021年度も文献収集や史料の読解につとめた。内容としては、十字軍期エルサレムとその周辺におけるコプト教会やその修道士たちとラテン教会、シリア教会、ビザンツ教会との関わりについて研究した。昨年度に引き続き、エルサレム周辺に隠遁するビザンツ系の修道士と、ラテン教会やコプト教会などの修道士らとの交流を中心に分析を行った。とりわけ、エルサレム郊外のマール・サバス修道院に集う隠修士らの活動に注目した。この修道院はビザンツ期から続いているが、十字軍期にはヨーロッパからの修道士たちもこの地における隠修士の修行に憧れ、在住するようになった。同様の傾向は、コプト教会にも見られる。また、中東におけるドミニコ会の活動の重要性も浮かび上がった。このような宗派を超えた教会間の交流が、15世紀の教会合同運動の礎になったと考えられる。

４．研究成果

15 世紀、ヨーロッパにおいて東西教会合同運動が盛り上がっていた頃、中東においても、反カルケドン派の東方キリスト教諸教会は互いの連携を強化し、カトリック教会による呼びかけにも積極的に対応していた。迫害やペストの影響により弱体化しながらも、中東各地の東方キリスト教諸教会が互助しあうことで生き残っていった様相を、コプト教会史料を中心に検討した。

2017年度は、東方キリスト教諸教会とローマ・カトリック教会との歴史的関係を考察するために、時代を十字軍時代に遡り研究を進めた。この研究については2017年12月に東京で、そして2018年3月にベイルートで開催されたシンポジウムで報告した。また、15世紀におけるコプト教会と他の東方教会との関係についても、2017年9月にベイルートで開催された研究会で報告し、現地の研究者から様々な情報を得ることができた。

2018年度は、十字軍時代を中心に東方キリスト教諸教会とローマ・カトリック教会との歴史的関係を考察した。2017年に学会で報告した内容については、論文として成果発表をすることができた。また、2018年度の研究の成果については、2019年3月にレバノンのバラマンド大学で開催されたシンポジウムで報告し、現地の研究者と意見交換をした。なお、2018年度後半は産休と育休を取得していたため、海外調査を行うことができなかった。

2019年度は13-15世紀に形成された、キプロス島におけるコプト教会のコミュニティーに注目した。年度の後半は2020年7月に開催される予定であった国際コプト学学会、アラビア語キリスト教学会にての本研究に関する報告準備をしていたが、両学会とも2021年に延期になってしまった。

2020年度も昨年度に続き、13-15世紀に形成された、キプロス島におけるコプト教会のコ

ミュニティー、そしてエルサレムとその周辺におけるビザンツ教会の活動について分析をした。これらの内容は2020年7月に開催される予定であった国際コプト学学会、アラビア語キリスト教学会にて報告するはずであった。これが本研究の重要な成果の1つであるはずであったが、両学会とも2021年に延期ののち、2022年に再延期となってしまった。これにより、研究の報告、そして論文として投稿のプロセスに遅れが生じた。また、2021年度は申請者の体調不良もあり、成果の少ない年となった。また、2021年度も前年度に引き続き、海外からの書籍が手元に届くまで想定の数倍の時間がかかり、国内の大学図書館も外部利用ができないなど、必要な文献を入手するまでに時間のロスが大きかった。

2022年度は国際学会や国内のシンポジウムにて、今までの研究の成果報告を行なった。まず7月初旬にフランス・パリで開かれたアラビア語キリスト教学会では、中世のコプト教会文学におけるビザンツ教会の聖人崇敬の影響、その背後にあると考えられるエルサレム郊外のマール・サバス修道院のネットワークについて報告した。その1週間後にベルギー・ブリュッセルで開催された国際コプト学学会では、上記にコプト聖人伝に記された具体的な記述について検討した。8月には、東方キリスト教学会大会のシンポジウム「「東方キリスト教諸教会における「聖なるもの」への崇敬—人・物・場所—」にてアルメニア、ジョージア、現代コプト教会の研究者とともに登壇し、パリの学会で得られた成果について報告した。東方キリスト教学会大会の報告文は学会誌『エイコーン』にて2023年度中に刊行される予定であり、国際コプト学学会の報告論文も近年中に刊行される見通しである。

国際学会会場にて様々な研究期間の研究者と意見交換をすることができたが、これら交流は帰国後もオンラインで続いており、本科研課題の内容を深化させるとともに、次の研究課題につなげることができた。このような点おいて、2022年度は成果の多い一年であった。

なお、この研究課題は東京外国語大学アジア・アフリカ研究所における共同利用・共同研究「中東社会における宗教宗派的・政治社会的少数派に関する研究（jrp000227）」（2016-2018年度、代表：近藤洋平特任研究員（当時））と連動した。この研究課題にて 2017 年 3 月に AA 研、2017 年 9 月にベイルート中東研究日本センター、2018 年 3 月にベイルートのサン・ジョゼフ大学、2019 年 3 月にバラマンド大学で報告し、国内外の研究者と交流・意見交換を行った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 辻明日香	４．巻 83
２．論文標題 十字軍と中東のキリスト教徒（特集 宗教的「他者」化と共存のポリティクス）	５．発行年 2018年
３．雑誌名 史潮	６．最初と最後の頁 4-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 辻明日香	４．巻 19
２．論文標題 エジプト・ナイル中流域のキリスト教社会	５．発行年 2018年
３．雑誌名 フィールドプラス	６．最初と最後の頁 10-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 辻明日香	４．巻 52
２．論文標題 中世コプト教会の聖人崇敬におけるビザンツ教会の影響	５．発行年 2023年
３．雑誌名 エイコーン	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　2件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 Asuka Tsuji
２．発表標題 Survival strategy of the Copts in the Crusader period
３．学会等名 Studies on Religious and Socio-Political Minority Groups in Middle Eastern Societies, University of Balamand（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 辻明日香
２．発表標題 十字軍と中東のキリスト教徒
３．学会等名 歴史学会第42回大会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Asuka Tsuji
２．発表標題 Relationships of the Coptic Church in the Fifteenth Century
３．学会等名 Minorities in the Middle East, hosted by the Research Center and Publications on the Middle East, Saint Joseph University（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Asuka Tsuji
２．発表標題 Byzantine and Syriac Influences in the Copto-Arabic Hagiography of Yuhanna al-Rabban
３．学会等名 11th International Conference of Christian Arabic Studies（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Asuka Tsuji
２．発表標題 The Life and Miracles of Yuhanna al-Rabban
３．学会等名 12th International Congress of Coptic Studies（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 辻明日香
２．発表標題 中世コプト教会の聖人崇敬におけるビザンツ教会の影響について
３．学会等名 東方キリスト教学会2022年度大会・シンポジウム「東方キリスト教諸教会における「聖なるもの」への崇敬ー人・物・場所ー」（招待講演）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計3件

１．著者名 Asuka Tsuji, "Survival Strategies of the Copts in the Medieval Period,) in Yohei Kondo (ed.),	４．発行年 2021年
２．出版社 Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies	５．総ページ数 204
３．書名 Survival Strategies of Minorities in the Middle East: Studies on Religious and Politico-Social MInority Groups in Middle Eastern Studies	

１．著者名 柴田　大輔、中町　信孝	４．発行年 2018年
２．出版社 勁草書房	５．総ページ数 400
３．書名 イスラームは特殊か　（第10章執筆）	

１．著者名 林佳世子・大黒俊二	４．発行年 2022年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 292
３．書名 ヨーロッパと西アジアの変容 11~15世紀(イスラーム支配下のコプト教会を執筆)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関